



「自分にできることは何か？ そこから生まれた教え子たちとの英語本出版」

ALT(外国語指導助手) マシュー・ロウ氏 (イギリス)
仙台の学校で英語を教える ALT



アマゾン「Let's Pop Culture!」
<http://www.amazon.co.jp/Lets-Pop-Culture-Japanese-Students/dp/1482072505>

「シャイ」な日本人。自立を心がけ、 必要な寝具等は自身で用意した

震災時は学校にいました。イギリスでは経験したことがない大きな揺れに驚き、このままアパートに居るのはとても不安でした。アパートを後にして、中国人の友人と近くの立町小学校へ避難しました。

避難所では、周りの日本人が優しくしてくれましたが、食事の手配等で忙しうだったために頼ることはできなかったです。自立を心がけ、必要な寝具等は自身で用意しました。4日間避難所にいましたが、通訳をしてくれたり、交流をしてくれたりする人はいませんでした。日本人は「シャイ」なので仕方ないですが、ジェスチャーでもいいので、コミュニケーションする気持ちを持って接することは大切ではないでしょうか。日本語での日常生活に不安があったこと、食事の心配、そして何より先の見えない仙台での生活、こう考えるとこの時は仙台を離れざるを得ませんでした。

自分なりに何かできないだろうか？ 高校生と本を作ることを思いついた

仕事も考え、まずは知人のいる東京・大阪に一時避難することを選びました。お世話になっている業務委託会社から資金を貸してくれるという提案があったの

で融資してもらいました。この提案はとても助かりました。

残金も少なくなって3週間ほどで仙台に戻ると、知人からの紹介で多賀城で泥かきボランティアを数日行いました。この時も将来への不安は心を離れませんでしたし、被災した教え子や、その親への心配も募っていました。「労働の提供も大切だが、自分なりに何かできないだろうか？」そう考えて思いついたのが、高校生と本を作ることでした。

日本の文化を世界の人に知ってもらう英語の本をつくらう。そして、収益金を被災地や高校生のために使ってもらおう。この提案を日本人の先生に説明してもらったところ、授業中なのに飛び上がっ



て喜んで涙をこぼす生徒もいました。

シャイな高校生の自主性を引き出し 出版した「Let's Pop Culture!」

タイトルは「Let's Pop Culture!」。編集とコーディネーターの役割を務めました。本を作るための授業のやり方も自分で計画を立てました。生徒それぞれが好きな題材で日本文化を英文で紹介。可愛い挿絵も生徒の有志が描いてくれました。

普段は全然英語に興味のない生徒が一番長い記事やコラムを書いてくれ、普段英語を話す時には「シャイ」なのに、あんなに英語ができるんだと驚きました。絵もとても上手で感動しました。

本はアマゾンから出版。収益は被災地へ寄付されるプロジェクトです。海外の読者からも面白いというメッセージをもらいました。現在、第二弾も計画中です。自分の発案で生まれた英語の本が、地元の高校生の手から世界に広がっていることに喜びを感じています。



「日本語を話せるようになろう。日本の友達をつくらうと思った」

東北電子専門学校国際ビジネス科 2年 ウリチフ氏 (中国)

震災後約1週間で、同じアパートの友人をはじめ皆が帰国してしまい、私も周囲の人から帰国を勧められました。しかし、自分はえらくなりたいと思ひ、やりたいことがあって日本に来たのだから、自分の目標を達成しない限り、帰国はしないと決意していました。

震災の時は今よりも日本語ができず、

日本人の友達もいなかったの、不安を感じたり、寂しい気持ちになりました。震災を契機に、日本語をもっと話せるようになろう、日本人の友達をつくらうと強く考えるようになりました。

震災後のアルバイト先での接客で、時折、日本人からひどい言葉を言われることがあります。それは、自分の日本語がまだ

不十分であることにも原因があると感じています。言葉ができないと、コミュニケーションの壁になってしまうので、今後も日本語の勉強をしっかりと考えています。今では日本人の友達もできました。日本人も中国人も、それぞれ特性があるので、その特性は尊重していこうと思っています。



「日本人との家族同然のおつきあい。夫婦間の信頼関係が大切」

主婦 東北インターナショナルスクールPTA会長 ティファニー・ブラウン氏 (アメリカ)
ご主人 陸上自衛隊東北方面総監部 在日米陸軍連絡将校 スティーブン・ブラウン氏
子供達4名 紺野太樹君 小竹佐知子さん
家族とともに仙台に暮らす主婦



教会で家族ぐるみのお付き合い。 紺野太樹君の助け

当時4歳だった息子と知り合いの日本人太樹君15歳の3人で、彼の中学卒業食事をしていた時に震災にあいました。上の3人の子供達はインターナショナルスクールで授業中でした。家族みんなのことが頭に浮かび心配になりましたが、普段よりしっかり者の太樹君は、すぐに津波情報や日本語ニュース、避難情報を冷静に教えてくれて大層頼りになりました。私を『第二の母』と慕う彼がいてくれたおかげで、揺れの中でもその後も随分と助けられました。迎えにきた太樹君の両親にお願いし、帰国するちょっと前まで生活を共にしました。

夫は東京にいました。夕食後にニュースで事の重大さを知ったそうです。困ったのは交通手段で、レンタカー3台に乗りあい13日仙台へ到着。太樹君を加えた家族全員と涙がらの再会をしました。

夫を信頼し、 成田からテキサスへ戻った

大使館から連絡があり、翌週金曜に子供4人と帰国。仙台に残って大好きな日本と友達を助けたかったのですが、「何かあったら僕が後悔する。お願い」と夫から懇願され、アメリカへ一旦帰りました。タンクにあった灯油や食料品など使えるものは友人にあげました。当初は、仙台からヘリコプターで座間基地(神奈川県)に移動する予定でしたが雪のために中止。結局、新潟経由のバスに乗って成田からテキサスへ戻りました。『米軍トモダチ作戦』における自衛隊との調整役として石巻の支援を行っていた夫は、バス停で「僕はきつと何ヶ月も帰れないだろう。いつ会えるかわからない。これからやらねばならない使命がある」と言いながら見送ってくれたのがとても辛かったです。

太樹君には、テキサス避難中にも日本の動向や教会の動きを教えてもらい、交流をさらに深めていくことができました。

夫婦の信頼、家族への想い、 そして日本の家族

「軍人の奥さんは強い。留守をしっかり守りますよ」家を守る責任を心掛けて生活を送ってきた私も、今回のような有事では、4人の子供がいるのでどうしてよいかわからなかった時もありました。大変な任務に就

いて忙しい日々を送る夫のことはいつも気がかりでした。

しかし、二人の間には、通常の夫婦の関係とは異なる『絆』があります。軍の文化に、『軍人の妻が強くないと軍の和・輪を守ることはできない』というものがあります。夫は私たち家族を信頼して震災の時は犠牲者のことを優先し働いてくれました。そして震災後の今も家族のために尽くしてくれています。「Trust goes in both ways」二人の間には双方向の信頼が存在しています。

日本の家族とも言える人たちがいることも心強かったです。太樹君は、一番下の息子と「Brother from another mother (他のお母さんから生まれた兄弟)」と言っていい関係です。またいつも気にかけてくれる日本語指導の小竹佐知子先生には、文化習慣、地震情報も教わりました。日本人との関わり方や日本人特有の謙遜の気持ちなどを教えてもらっています。



「『書画』で心を癒したい。文化の交流で日本の友だちを増やしたい」

北京懷仁堂漢方薬局 (中国漢方医師・医学博士) 侯殿昌氏 (中国)

震災の年の3月末から三陸沿岸部へ支援物資及び漢方薬の送付、がれきの撤去などの支援活動をしました。また、同年7月に日中の書画家たちと慰問団をつくり、書画を通じて国境を越えた愛を被災地に届けました。右下の写真は、絵の実演会を開催した七ヶ浜での活動を撮影したもので、強く印象に残っています。

平成26年1月に、来日20年の感謝の気持ちを込めて32枚の『馬干支の書』を書き、被災地の方々に寄贈しました。書画の文化で被災者の心を癒したいと考えたからです。今後も文化の交流や仕事を通じて日本人の友達をつくっていこうと考えています。互いの文化の違いを知り、それぞれが尊重の気持ちを持って交流を深

めていくべきだと思います。





「日本を学ぶ。その最初の場所としての日本語学校の取り組み」

仙台国際日本語学校

日本語とともに文化を伝える日本語学校

学生たちはスムーズに避難。 日ごろの防災訓練の大切さを実感した

本校では、震災前から、授業の中で地震から身を守る方法を学生に教えたり、地震についてのDVDを見せたりしてきました。また、学校の設立時から東北電子専門学校と一緒に、年2回の防災訓練を実施してきました。

震災時には、職員の的確な指示と誘導に従って、学生たちは、7階から階段を使って校舎前の広場へと問題なくスムーズな避難をすることができたと思います。この時の学生の様子を見て、「日ごろの防災訓練がいかに大切か」ということを実感させられました。

「何か役に立つことをしたい」 震災からはじまった主体的な活動

学生たちはこの震災で様々なことを学び、「主体的な活動をする」ようになったと思います。特に印象に残っているのは、地震の翌日に自転車で津波の被害の様子を見に行った学生がいたことです。震災についての情報を、報道等からではなく、自分が実際に現地に行き見て

聞ることによって得ようとしていたのだと思います。また、原発に関する政府情報を鵜呑みにすることなく、自分の頭で冷静に考えようとする学生がいたことも印象に残っています。

震災があった年は、多くの学生が被災地でボランティア活動を行いました。被災地で「何か役に立つことをしたい」という学生たちの要望に応え、教員の側で学生が円滑にボランティア活動ができるように準備をしました。学生は被災地で日本人と協力しつつ、多くのことを学べたと思います。

地域の情報の共有から 未来の「共存」を目指して

震災ではネットワークの重要性を痛感しましたので、今後の災害に備え、ホームページよりも情報の発信が早いフェイスブックに力を入れようと考えました。より多くの学生に普段から学校のフェイスブックを見てもらうために、情報の更新に努め、学生が考案したゆるキャラも登場させています。

『にほんごでよむ仙台・宮城』は、学



生の日本語力を向上させ、共通の話題をつくることで地元の人と交流し、地元意識を持つきっかけにしたいという意図で作成しました。日本人や本校以外で日本語を学んでいる外国人が読んで面白いものになっていると思います。

仙台市では「多文化共生」を掲げていますが、まずはお互いの違いを知ることから出発するべきで、むしろ「共存」という言葉の方が適切ではないでしょうか。外国の方には日本の文化や習慣、ルール等を知ってもらい、距離感をとりながら上手に生活してもらうことが必要だと考えています。

「学んだことは、日本人の姿勢。 プライドを持って『困った時はお互い様』」

東北インターナショナルスクール校長 ジェームズ・スチュワード氏（カナダ）



震災直後の校内の様子

当校では、4歳から18歳までの生徒が同じ校舎に在籍し、共に学んでいるため、タテの関係がとても濃いです。震災時には、上の子が下の子の面倒をみてくれて助け合うことができたのが、良かったことのひとつです。

大地震にもかかわらず、お互い助け合った日本人の精神は素晴らしいと感じました。同じ状況が他の国で起こったら大変な事態になったでしょう。皆が前向きな姿勢で取り組み、プライドを持って行動していた、という印象でした。複数の人間が集まって何かができるという集団的な

考え方も学びました。

外国で暮らすには、地域文化を学ぶことからスタートするのがいいと思います。受け入れられるように自分を教育し、適合させていくことが重要です。数々の国に住んだ経験がありますが、いつも『地元の文化』を尊重してきました。

震災では廻りの人たちにとても親切にしてもらいました。お互いに入り込んでいくことで、「困った時はお互い様 komatta tokiha otagaisama!」をつくっていくことができました。



外国人に関する団体インタビュー 検証 2 各団体の動きはどうだったか？

支援団体や関連団体がどのように機能したか、当時の課題や震災後の取り組みについても紹介します。

CASE 1 テーマ：領事館・大使館の任務



「有事の際には、領事館が安否を確認し、 援助・保護する役目を持っている」

駐仙台大韓民国総領事館／梁桂和（ヤンゲファ）副総領事 梁祐宗（ヤンウジョン）交流協力官
韓国と東北6県をつなぐ外国公館

避難所として機能。 夜間も含め24時間体制であった

まず、建物の安全性を確認しましたが、特に大きな問題はなく、幸いにして電話と水が使用可能、加えて電気も発電機を利用して供給出来たので助かりました。24時間体制であった震災当日の職員は12名。女性スタッフは鳴り続ける電話の対応に追われ、他の職員は外部での救援作業にもあたりました。避難者の中には、食事の提供を手伝ってくれた人もいて、総領事夫人も加わって賄う状態でした。

外国にいた場合の有事の際には、領事館や大使館が安否を確認し、援助・保護する大切な役目を持っています。震災当日、留学生や韓国からの来訪者が徐々に集まって1階多目的ホールは避難所になりました。2～3日後には避難者が200名位に増え、中には帰化した石巻の妊婦さんの姿もあり、震災で夫と義父を亡くし3人の子供達と4月末頃まで過ごしていました。その後の支援など領事館で対応しています。

韓国から「緊急救助隊」と 外交部「迅速対応チーム」が派遣

県庁からの広報物をコピーして掲示するなど、タイムリーな情報提供に努めました。また、帰国希望者に向けては、秋田などへの移動手段を確保するなど600名超の帰国支援を遂行しました。

震災二日目、韓国から、行方不明者の捜索と救助活動のために『緊急救助隊』と、外交部の『迅速対応チーム』の二つが派遣

されました。チームには訓練を受けた多数の専門者、そして2月まで仙台任務に就いていた書記官も同行してくれたのでスムーズに動くことができ助けられました。震災を乗り越えられたのは、培ってきたお互いの信頼と対応力があつたからだと思います。また、東京の企業や各地の民団、近隣の関係団体から様々な物資を支援してもらったことも大きな力になりました。

外国人も日本人も郷土地域を構成する一員

仙台の街で暮らすということはどういうことでしょうか？国籍で分けるものではなく、外国人も日本人もこの仙台の地に住む人としてとらえ、相手を理解することが大切であると思っています。

仙台にいる外国人は郷土地域を構成す

る一員でもあり、また仙台のことを母国に配信するという橋渡しの役目も持っています。震災後に、スムーズなネットワークの必要性を感じまして、東北6県の韓国人連絡網を充実させました。仙台市は「人にやさしい街」だと感じています。韓国人に対しても同様で、地球フェスタ*の開催や日本語教室の制度など色々配慮してくれていると思います。

被災者への支援活動はこれからも続けていきます。2014年2月には、涌谷町で地場食材を使った韓国料理を紹介しました。今後も料理教室や映画上映会を通して交流を深めていき、このような活動の継続と県内の高校生へ向けての交流事業をさらに展開していきたいと考えています。

*国際センターで行われるイベント

「宮城県で一番大切なのは、 『復興』であると強く思っている」

復興支援の取り組み



沿岸部・石巻への支援物資提供をしてきましたが、時間の経過と共に被災者の要望する支援の内容が変化してきていると感じます。現在は文化的なことや精神的な面の支援が必要であると考え、K ポップコンサートや、仙台白菜と韓国の文化であるキムチ作りを融合させたイベント（2013年11月）を開催し、二つの国の文化を共有することができました。

宮城県で一番大切なのは、『復興』であると強く思っています。2013年6月に赴任した駐日大使は、被災者に向けて様々な支援を行っており、赴任直後には石巻の仮設住宅を訪問して被災者の方に励ましの言葉を掛けました。その後も再訪し、領事館イベントにも招待しています。イベント収益金の寄付や学生の韓国訪問などを通して、復興支援に取り組んでいるところで



「留学生のマナーが悪かったという苦情。地域との連携の強化を」

東北大学教育・学生支援部留学生課
多くの留学生が学ぶ東北大学

留学生課オンライン登録システムを利用した安否確認

震災当時の東北大学には1500人ほどの留学生がいました。留学生課として留学生の安否が心配でしたが、電話・携帯が通じる状況ではありませんでした。そこで、3月16日に留学生課オンライン登録システムを利用した安否確認を開始しました。さらに同時並行で教務課等も安否確認を実施。3月28日には1499人の安否確認を終了し、留学生全員の無事が判明しました。

安否を確認した時点の留学生の所在地は、仙台市以外の日本国内にいた留学生が21.8パーセント、仙台市にいた留学生が5.7パーセントでした。72.5パーセントの人が自国に戻っていました。震災後2、3日でほとんどの留学生が仙台を離れていました。



震災直後の国際交流会館の様子

とにかく帰らなければという雰囲気になってしまった

三条にある国際交流会館は避難場所ではありませんでしたが、三条周辺のアパートにいる留学生をはじめ市内の外国人が情報を求めて集まってきました。外国人には国ごとのコミュニティーがあって、独自に情報を得ているので情報が早く、若林区や宮城野区、市外といった遠方に住む外国人も集まって来ていました。

国際交流会館は254室あり、家族も含めて約300人の外国人が暮らしていましたが、震災後15人くらいになってしまいました。原発のニュースが流れてからは、交流会館のスタッフが仙台は避難区域になっていないことをいくら説明しても、とにかく帰らなければという雰囲気になってしまいました。地震・津波よりも原発の問題が大きかったと思います。ライフラインが止まり、シャワー、暖房が使用できなくなってしまい、生活できなくなりましたということもあります。

震災時の反省を活かし、情報・意識の共有を図ってきたい

留学生が交流会館に荷物を残したまま仙台を離れてしまったので、残置物の整理がかなり大変でした。連絡先が分からない留学生の荷物の処理については、部局に電話して確認作業を行いました。民間のアパートの残置物についても教員等が



震災時のままの室内の様子

片づけを行いました。また、民間のアパートは留学生が入居する際に大学が保証するシステムになっていたため、未払い家賃についての問い合わせ等が20～30件ほど留学生課にあって、保険によって支払いをしたケースもありました。

このような震災時にあがった問題も解決できるように、留学生に周知を徹底していきたいと思います。また、水がなかったためアルファ米*を食べられなかったという反省もあり、水の備蓄をするようになりました。

留学生の中には、避難所になっていた三条中に行った人もいましたが、留学生のマナーが悪かったという苦情もありました。留学生の防災対策や避難所での意識向上を促すためにも、地域の町内会との連携を深め、避難訓練に多くの留学生に参加してもらうような取り組みも行っています。

*非常食で水を注ぐだけでできるご飯

「三条の町内会と連絡を取り合って、留学生が避難訓練に参加するよう呼びかけている」

地域の町内会との連携を強化

年1回各キャンパスで教職員を対象に行っていた避難訓練を英語でも放送するようにしました。三条の町内会と連絡を取り合って、留学生が避難訓練に参加するよう掲示板等を通じて呼びかけています。11月に三条中で行われた避難訓練には、40～50人の留学生が参加しました。

4月と10月に年2回行われる留学生のオリエンテーションでは、北警察署の方に交通ルール等の説明をしてもらって、避難場所や避難方法の説明を強化してもらうようにしました。

震災後、仙台市青葉区の区民生活課の避難所準備委員会にオブザーバーとして



参加しています。今回の震災は原発の問題が起きて留学生が皆国際交流会館を離れたために備蓄物が足りましたが、そうでなかったら足りなかったかも知れません。できれば交流会館を避難場所に指定してほしいと思っています。



「大切なことは相手の身になり、みんなで気持ちをシェアすること」

仙台アブロードランゲージセンター校長 仙台日本トルコ協会会長 サブリ・チャキル氏 (トルコ)
いち早く活動をしていたトルコ協会



「キムセヨクム」というレスキューチームがやってきた

震災当日は東北大学の学生で、住んでいた三条では、ガス火事がおこったためガス使用が一ヶ月止められてしまいました。そこで翌日から北目町に住む友人のアパートで妻と共に暮らすことになりました。

12日午後にはトルコから「キムセヨクム」というレスキューチームがマスメディアと共に早々にやってきました。「キムセヨクム」とは、「誰かいませんか?」という意味です。医者1名を含めたチームは早速に七ヶ浜や塩釜、松島の沿岸部に状況把握と現場撮影に出向き、支援活動の準備を開始しました。間もなく、必要な物資がトルコよりコンテナで計5台運び込まれ、またレスキューメンバーもさらに加わりました。

私は、友人の所有する上杉のマンション

5部屋を借りてレスキューチームの活動拠点にできるよう交渉したり、様々な情報や資料をまとめて情報提供を行ったり、コミュニケーションのサポートをしたりすることでキムセヨクムの活動を支援しました。

帰国したトルコでデマを払拭するための広報支援を実施

帰国は自己判断でという政府の見解の中で、17日に原発の話を受けた東京トルコ文化センターより帰国の話があり、「キムセヨクム」からは無料の飛行機チケットの提案がありました。トルコ人にはとにかく帰国してもらって本来の仕事に専念したいという強い思いがあったからです。残りたい気持ちは強かったのですが、いったん帰国することを決めました。

トルコではランゲージセンター帰国者とチームになって支援活動を行いました。「原発デマを避けたい、そのためにはたくさんの人に会って事実を伝えなければ」と、強く思いました。メディアの弱点は小さなことも大きくしてデマ情報になりやすいことです。苦勞をしている人の邪魔をして欲しくないという気持ちでいっぱいでした。私は、きちんと状況を伝えるために被災者としての立場でテレビニュースなどに出演しました。そして、トルコ政府が立ち上げた「Turkish Red Crescent (クズライ)」が開催するチャリ

ティーイベントにも協力しました。

トルコでは物資のシェアはもちろん、気持ちをシェアすることが当たり前

日常から「場」をつくり、トルコ文化を知ってもらっています。その場において心をあわせることが大切だと思っています。仙台の人たちはお互いを知らないのでは、と感じる時があります。お茶会など「輪をつくる場」があれば、結果的に、暮らしやすい街になるのではないのでしょうか。

震災の時は、「日本人も困っているだろうな。何が必要だろうか?」と相手の身になって支援を考えました。「戦争経験のない、若者は相当な困りようだろう」と想像。物資のシェアはもちろん、気持ちをシェアすることも大切だと考えます。

トルコのことわざに「If your neighbor is hungry, he is not one of us.」(お隣さんにおなかをすかせてると仲間と言えない。)というものがあります。避難所に行った時にも、自分たちの毛布だけでなく日本人の誰かに使ってもらえるよう、あるだけ持参しました。トルコでは「当たり前」のことで。

「防災の面では文化の違いを超えてコミュニケーションが大切」

仙台イスラム文化センター(ICS) 代表理事 佐藤 登氏



イスラム教の中にも宗派があり、信仰に対する厳格さ度合は幅広いのですが、宗派や国に関係なく仲良くできる心がけています。震災時、イスラム文化センターは3人体制で、情報もなかった中で2ヶ月間モスクに泊まって対応しました。被災地の拠点のようになり、救援センターの後方支援のようなことを行いま

した。避難所では一方的に援助を受けるのではなく、留学生は若くて元気な人がたくさんいるので、支援される側ではなく支援する側にもなれるよう、大学でも指導や意識づけしていくことが必要だと感じています。イスラム文化センターでも協力してくれそうな人に声をかけて、片平小学校で

の防災の催しに参加してもらっています。イスラム教の人は日本の神社・仏閣に興味を持ちにくいようです。しかし、有事においてはコミュニケーションが大切になるので、日頃から文化や言葉の違いを知ることは必要だと思います。